

# 日本語の品詞から見た形容詞論

李寛子

## 一、品詞の由来

日本の文法研究が十八世紀に始まり、明治以前の各学説をもとに、明治三十年大槻文彦先生が、和洋折衷文典式の「広日本文典」を完成された。以後日本文法を研究する学者は、少なからず大槻先生の学説の影響を受けている。

大槻先生は単語を八品詞に分け、形容動詞、連体詞を認めておらず、形容詞に含めておられる。これは学習上かなり不便をきたすと思われる。但し、助動詞が特設されて助詞と区別されたことは、以後の研究者にとって、非常に有利だと思われる。

三矢先生は大槻先生の説を受け、やはり形容動詞と連体詞を立てておられないが、名詞を純名詞と代名詞に分けてあるところは、一歩進んだ考え方だと思ふ。和式文典の長所をよくとらえ、語の用法を比較文法上、的確に示した点に特別なところがあり、形態的品詞分類法は文法論上にも大きな影響を与えている。

山田先生は意義面に力点を置き単語を体言（名詞、代名詞、数詞）、用言（形容詞、動詞、形式用言すなわち存在動詞）、副詞（接続詞、感動詞）、形式語（付屬語）の四つに大別しておられる。付屬語には助詞を立てて、助動詞を立てず用言の語尾の複尾語としておられる。これは従来の考え方で、今は、やはり助動詞という品詞を設け、動詞型、形容詞型、形容動詞型

と活用を伴う助動詞と、活用を伴わない助動詞とに分ける。

橋本先生には文法論という定った説はないが、文法という言語単位を設定し、形容動詞を品詞として理論づけた。しかし、品詞分類表にはその品詞を出しておられない。橋本先生が形態面に力点を置いて説明しておられるのに対し、松下先生は本性と副性から意味機能の異同に関する内面的な説を上げておられ、形容動詞を認められない。

時枝先生は総合的語言観から先生独特の言語過程説を建立し、山田文法、橋本文法をしのぐ機能文法を立てられ、「詞」と「辭」の区別をはっきりとし、それが品詞分類の最高の基準とされている。又、有名な入子型式という特殊な文型を定められた。

時枝先生は名詞と代名詞を別にし、形容動詞を認められない。形容動詞という品詞を設けずに、名詞に助動詞の「だ」がついたものと考えられている。十品詞になるけれども現在の学校文法では、九品詞に属する。

三尾先生は十品詞の分類に従うが、形容詞、形容動詞、連体詞の名称を「い形容詞」「な形容詞」「の形容詞」と名称を改め、この説は曹欽源先生と英紹店先生が受け継いでおられる。形容詞の三要素は①連体形が(どんな)修体文素に、②連体形が(どんなに)修用文素に、③終止形が(どうだ)述語になれることで、形容動詞とは同じように主として修飾(修体、修用)するが、活用がちがう。又連体詞の特色は、(どんな)修体文素になるか、それだけが専門の働きで、形は一種しかない。上述の如くそれぞれに修飾する意味内容上活用形が違い、意味の体系が確立していないのが実状であるから、やはり形容詞、形容動詞、連体詞と分類して、形態から入るのが無難であり、何よりも理解しやすいと思う。

芳賀先生は「い型形容詞」と「だ型形容詞」と称し、形容動詞という品詞を認めておられる。

大久保先生と松山先生は品詞を十一種類に分けておられる。つまり動詞、形容詞、形容動詞、名詞、代名詞、副詞、連体詞、接続詞、感動詞、助動詞、助詞である。これは九品詞と十品詞に比べ、更に新しい説として考えられる。どちらが正しいとか正しくないとかと見るべきではなく、両方とも一応認めるべきである。

現在学校文法として台湾で使われている品詞分類法は蔡茂豊先生の説がいちばん分りやすく、妥当であると思われるに普及している。品詞を自立語と付属語に分け、活用のあるものと活用のないものに分類し、学習者にとってたいへん便利である。

十品詞のうちで、よく問題にされるものの一つに、形容動詞がある。形容動詞は形容詞の一種だという説もあれば、名詞と同様に体言の一種だという説もある。しかし、いづれにしても「きれい」「しずか」「りっぱ」などのことばが「大きい」「おもしろい」「おかしい」(形容詞)などとも「本」「学生」「鉛筆」など(名詞)ともちがうということは確かである。

ここで文の述部を見ると、「です」「ます」体の文の文末には「います」「ません」の類と「です」「あります」「ありません」の類とがある。「います」「ません」の類のつくものは「動詞」と呼ばれている。「です」「あります」のつくものの中には「いいです」「くありません」のものと「!です」「!では(じゃ)ありません」のものとがある。

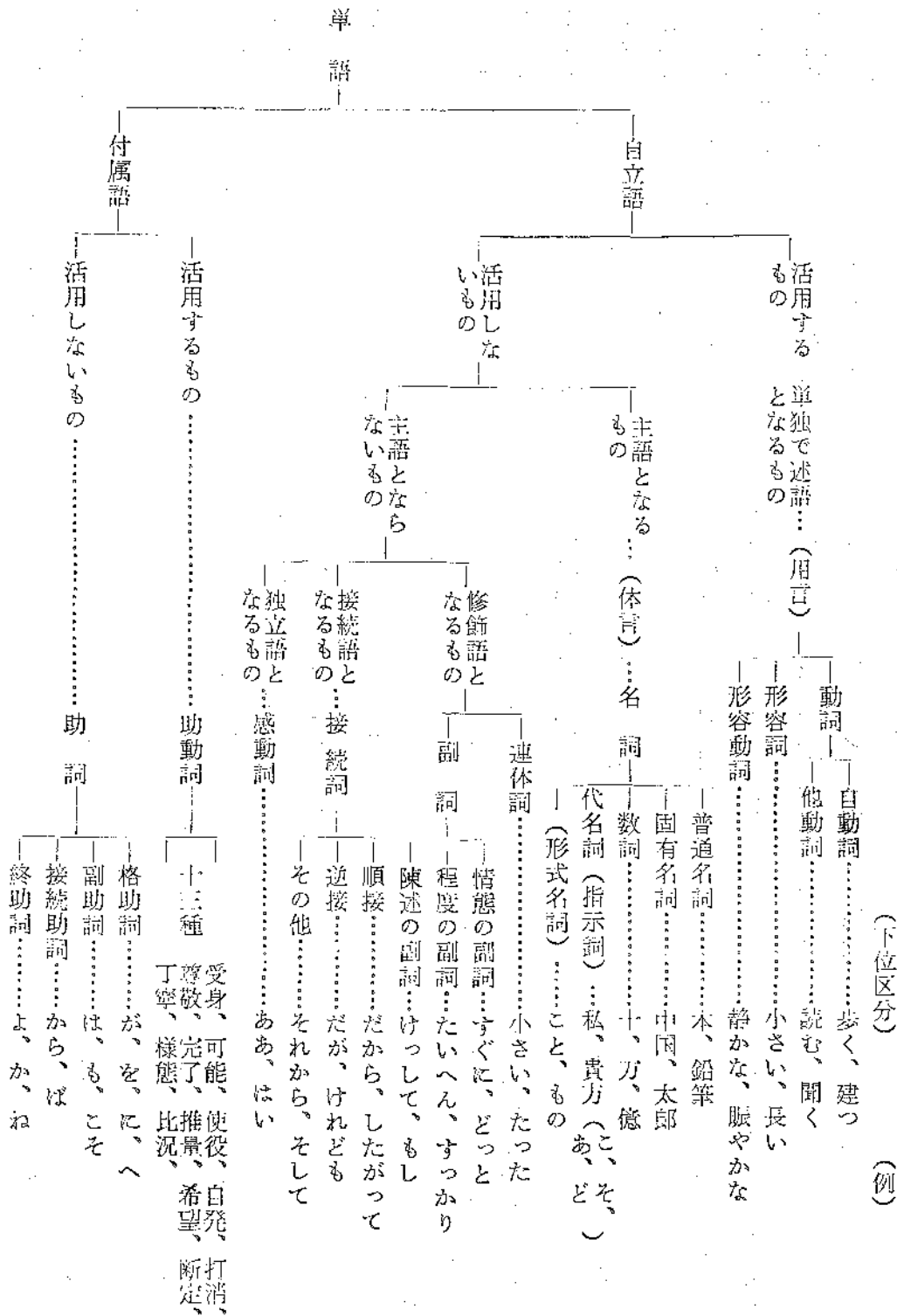
「大きい」「おもしろい」「おかしい」など「形容詞」は前者で、「本」「学生」「鉛筆」など「名詞」は後者である。そして「形容動詞」と言われる「きれい」「しずか」「りっぱ」なども後者である。このように形容詞と形容動詞とはちがっており、この点では名詞と同じである。しかし一方「きれいな人」と言つて、「学生な人」とは言わず「学生の人」と言う。

「とてもりっぱ」「とてもしずか」と言うが「とても学生」とは言わない。このように名詞と形容動詞ともちがっており、形容詞と共通の性質も持っている。

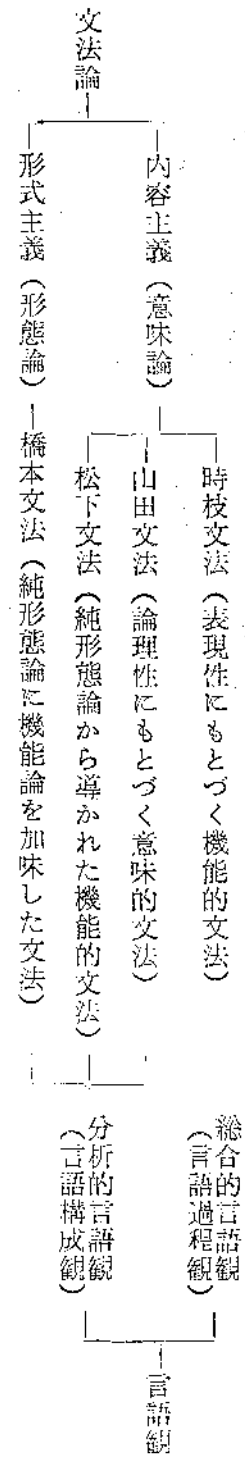
「きれい」「しずか」「りっぱ」などを英語と同じように形容詞とみなせるからと言つて、「大きい」「かわいい」などと同じことばだと言つてもまちがいなら、「きれいだ」「しずかだ」「きれいじゃない」「しずかじゃない」などと言つのが名詞と同様だからと言つて、これらを「学生」「本」などと同じ種類のことばだと言つてもまちがいである。

以上の分析でもはっきりと示しているように品詞の分類には形容動詞と言ふ品詞を立てるべきだと思われる。形容詞と形容動詞は明らかに違つるので、形容動詞は、後日研究をすることにする。

日本語品詞分類表を次のように整理する。



諸学説の系譜を図示すると



## 二、形容詞の特点について

- ① 自立語である。
  - ② 言い切る形が「い」で終る。
  - ③ 単独で述語になれる。
  - ④ 用言の一つである。
  - ⑤ ものごとの性質や状態をあらわす。
  - ⑥ 活用がある。
- そこでまず人に関する形容詞と、ものごとに関する形容詞とに大別して見ることにする。

## 三、人に関する形容詞を次の八種類に分けてみる

① 感覚をあらわすもの

快い—そよ風が吹いて、快い。

痛い―風邪をひいて頭が痛い。

気持ちいい―マッサージをすると気持ちいい。

②感情をあらわすもの

ありがたい―ご指導くださるとはありがたい。

おもしろい―この小説はたいへんおもしろい。

おかしい―夜中にしのび出るとは、ちょっとおかしい。

③味覚をあらわすもの

甘い―せんざいは甘い。

鹹い―この汁は鹹い。

辛い―牛肉そばは辛い。

④人を感情的に評価するもの

うやうやしい―あの先生はやさしくて、うやうやしい。

手厚い―入院中、あの医者から手厚い看護を受けた。

勇ましい―勇ましい進軍ラッパが聞えて来た。

⑤人の性格を評価するもの

男らしい―彼は男らしい。

つつましい―私はつつましい女性が好きだ。

まめまめしい―家内は一日中まめまめしく働いている。

⑥人を年令で考えるもの

じじむさい—そんなじじむさい恰好をするから、きらわれるのだ。

あどけない—赤ん坊があどけない顔をして眠っている。

若い—まだ若いのに、もう社長におさまっている。

⑦自分との関係で他人を評価するもの

そっけない—彼は誰に対してもそっけない。

すげない—すげない素振りに力を落した。

水くさい—他人じゃあるまいし、水くさいね。

⑧人やものを一般的に評価するもの

ふさわしい—彼にふさわしい相手を紹介する。

いやしい—いやしい身分の人とはつき合わない。

荒っぽい—君は荒っぽいね。

以上のように人に関係のある形容詞が実に多いことが分る。ものやことに適用される形容詞を次の八種類に分けてみる。

①物の形をあらわすもの

丸い—この窓は丸い。

四角い—本は四角い。

鈍い—鈍い音がしたが、なんだろう。

②物を量であらわすもの（反対語と対をなしているものが多い）

太い—太い縄で綱包する。

細い―細い針金のような腕。

多い―形容動詞は形容詞より多い。

③ものの感覚や質についてあらわしたもの

明るい―この部屋は明るい。

暗い―屋根裏は暗い。

濃い―濃い緑に包まれた境内。

④ものを感情で評価したもの

目ざましい―台湾の経済は目ざましい発展を見せている。

むつまじい―むつまじい仲を羨しがられている。

いかめしい―いかめしい顔つきで近寄れない。

⑤もの、ことの評価、程度をあらわしたもの

望ましい―いい成績をとるのが望ましい。

好ましい―好ましい仕事ぶりだ。

快い―あっさりした性質が快い。

⑥ものの音をあらわすもの

やかましい―窓の外がやかましい。

さわがしい―学校の休み時間はほんとにさわがしい。

けたたましい―けたたましいサイレンの音で目がさめた。

⑦ものの動きをあらわすもの



のろい—あの人の動作はのろい。(おそい)

はやい—はやい足取りで歩いて行った。

⑧ものを時代的に評価するもの

新しい—新しい字引の方がくわしい。

古い—この建物は古い。

以上のように形容詞はものごとの状態や性質をあらわし、又人の感覚や感情をもあらわすことが、はっきりとしている。大体の原則として「いい」で終る形容詞は、ものやことの状態や、人の感覚などをあらわす。

「新しい」で終る形容詞の、ほとんどが人の感情をあらわす。けれども「悲しい物語」「さびしい通り」「難しい問題」「はげしい性格」「手厳しい訓練」のように、ものや動作の状態をあらわすのに使われることがある。

普通の形容詞にはあまり変化がない。しかし「大きい」のように無限に延びて行くのもあれば(「小さい」と相對)「ない」のように絶対的形容詞もある。「ない」の反對語は動詞の「ある」を使う。

形容詞は内容によって十プラスになつたり一マイナスになつたりする。たとえば(對義語)

①本州は四国より大きい。(比較の大きい。)

本州は日本にとっては大きいが、外国の島に比べると、本州など、とるにたりない島である。

②この靴は兄には小さいが、弟には大きい。(対象に対して大きい。)

この靴は大きいからといって、弟にとって丁度いいとは限らない。

③大きいねずみがいる。(標準に対して大きい。)

ねずみに対しての感覚は人によって標準が違う。もっと大きいねずみを見たことのある人にとっては、小さいかもしれない。そうだからと言って、この人の目から見たねずみが小さいとは限らない。

又

① AさんはBさんより美しい。

② BさんはAさんより醜い。

美しくないことは醜いことではない。Aさんほど美しくないが、やはり美しい。

このように形容詞の対義語には中間体が多い。

① 日本には地下資源があまり「ない。」（標準に対して）

「多い」「少ない」には中間体があり、

「多くない」のは必ずしも「少ない」とは限らず、「少なくとも」のも「多い」とは限らないからである。

② 中国大陸からの留学生も「少なくはない。」（標準に対して）

この「少なくはない」も①と同様「多い」とは限らない。

#### 四、形容詞の活用

形容詞の活用は一種類しかなく、動詞の場合と違って命令形がない。語尾変化は「か行」に止まり、常体形容詞と敬体形容詞の活用形を一括してあることは、従来の分類法と異なる点であり、学者者にとって、分りやすいと思われる。



## 五、ウ音便に対する私の考え方

### (一) 形容詞の「ウ音便」

形容詞の連用形「く」に「ございます」「存じます」を連ねた場合に「く」が「う」に変るのを「ウ音便」と呼んでいる。なぜならば「k」が「u」に落ちたのである。その時語幹の一部にも変化をきたす事は、どの学説にも出ている。しかし語幹の一部というだけで、はたしてどの部分かということをはっきり指定していない。「ウ音便」を三つの場合に分けると

① 語幹の最後の音、すなわち語尾「い」音の上になる音が「う段」「お段」の場合は「く」を「う」に直せばよい。これは旧仮名遣いが新仮名遣いに変化したまでのことである。

良い、明るい、青い、寒い、面白い、暑い。

良うございます。明るうございます。青うございます。

寒うございます。面白うございます。暑うございます。

② 語幹の最後の音、すなわち語尾「い」音の上になる音が「あ段」の場合は「く」を「う」に直すほか、「あ段」の音と同じ行の「お段」の音に直せばよい。旧仮名遣い新仮名遣いに変化したまでのことである。

有難い、お日出度いい、お早い、お高い、

有難うございます。お日出度うございます。

お早うございます。お高うございます。

③ 語幹の最後の音、すなわち語尾「い」音の上になる音が「い段」の場合は「く」を「う」に直すほか、「い段」の音を拗音「ゆ」に直せばよい。それで「ーしい」形容詞はみなこの部に属する。

大きい、楽しい、嬉しい、美味しい。

大きい、楽しい、嬉しい、美味しい。

嬉しい、美味しい。

注意：「い」の拗音がないので可愛いは例外である。

「いゆ」と書いて「ゆ」の発音になるので

「可愛うございます」となる。

## 六、造語形に対する私の考え方

### 形容詞の造語形

形容詞の種類は、はたして「いい」「いい」の二種類だけだろうか。形容詞の造語形に関することを確認するために、一応形容詞の語尾を整理分類してみた。

例解国語辞典による収録を整理するつもりだったが、「危い」のように「な」音が漢字語幹の部分に入っているので、(危ない)「明確な語辞典」「広辞苑」「新和英大辞典」を参考にした。

形容詞語形分類表

	種 類	語 数	比 率
1.	しい形容詞	244語	41.29%
2.	名詞+形容詞	86語	14.55%
3.	い形容詞 (造語形のあるもの)	59語	9.98%
4.	い形容詞 (造語形のないもの)	44語	7.45%
5.	動詞+形容詞	28語	4.74%
6.	ない形容詞	25語	4.23%
7.	名詞+ない	20語	3.38%
8.	——ばい	16語	2.70%
9.	——たい	11語	1.86%
10.	動詞+ない	11語	1.86%
11.	形容詞語幹+形容詞	11語	1.86%
12.	——こい	9語	1.52%
13.	(漢字+仮名)+い (1語ずつしかないもの)	7語	1.18%
14.	……かい	6語	1.02%
15.	接頭語+形容詞	6語	1.02%
16.	——どい	2語	0.34%
17.	——ばい	2語	0.34%
18.	——ろい	2語	0.34%
19.	——るい	2語	0.31%
	合 計	591語	100%

以上のように細かく分類すれば十九種類にもなる。種類の如何にかかわらず活用形語尾は「―い」「―しい」にとどまるものであるが、造語形の有無を立証せんがためである。

## 七、本研究の結果

「い」語尾を除くと名詞（造語形）になるといふ説は、私の研究に依って多少是正すべきところがある。

1. 造語形は普通名詞には使われず、複合名詞を形成する要素のある名詞にのみ使われる。

長靴、 長袖、 長ズボン、 長旅、

2. 「漢字+仮名」の語幹の形容詞には造語形がない。（―しい）をも含む。

大きい、 危ない、 丸まっちい、 小さい、 明かるい、

3. 語幹の最後の音が「え段」で終ることはない。（ウ音便の項でもあげたとおり「え段」で終ることがないのが明らかである。）

高い、 低い、 長い、 短かい、 青い、

大きい、 嬉しい、 見苦しい、 久しい、 易しい、

4. 「しい」形容詞のほとんどは人の感情、感覚、感覚、性格などを表わすものである。

憎々しい、 涙ぐましい、 物悲しい、 惨たらしい、 空しい、

空々しい、 猛々しい、 由々しい、 古めかしい、 正しい、

5. 「―ない」には二種類あって、一つは形容詞であるところの

にべもない、 はかない、 はしない、 みつともない、 もったいない、

の部、もう一つは準形容詞であるところの複合形容詞の活用である否定形の造語形である。

## ② 動詞＋否定形ない（準形容詞）

思い掛けない、相容れない、限りない、聞きともない、頼み少ない、並びない、  
測り知れない、遣り切れない、頼りない、詰らない、煮え切らない、

## ③ 名詞＋ない（準形容詞）

味気ない、呆気ない、大人気ない、甲斐ない、気もない、  
口さがない、心ない、心許ない、術ない、然り気ない、  
素気ない、何心ない、何気ない、物足りない、情ない、  
遣瀨ない、据ろない、似気ない、面目ない、己むない、

## ④ 助動詞＋ない（準形容詞）

らしくない、たくない、がたくない、

## ⑤ 形容動詞造語形＋ない（準形容詞）

静かでない、賑やかでない、自然でない、

## 6. 形容詞慣用句

日本語の慣用句を構成する上で使われている名詞はかなり多い。その大部分は名詞プラス動詞の形で、名詞プラス形容詞の形の慣用句は数少ない、

慣用句の多くは二文節構成だが、三文節以上の構成のものもある。慣用句は結合度の高い連語で、原義や語源は、言語行動などの観点からするいろいろな問題が伴い、生活上でも学習上でも共に分かちがたい課題である。

次は、「明解国語辞典」「広辞苑」を参考に整理分類してみたところ、形容詞慣用句には下記の六種類あることが判明した。



(1)が格67句 (2)に格4句 (3)「し」の形12句 (4)名詞+形容詞46句 (5)形容詞自体16句 (6)「ない」の形50句  
その中から例を挙げると

(1)が格

「口が」と言えば「軽い」。

「尻が」と言えば「重い」。

「手癖が」と言えば「悪い」。

「気前が」と言えば「好い」。

「敷居が」と言えば「高い」。

「腰が」と言えば「低い」。

「顔が」と言えば「広い」。

「肩身が」と言えば「狭い」。

「面の皮が」と言えば「厚い」。

「影が」と言えば「薄い」。

と言うふうに形容詞慣用句は、利用度の高い、広く用いられている基本的な語が多く、又反対語を充分に用いている。

(2)に格

世智に疏い、帯に短かし、樺に長し、

世智に賢い、良薬口に苦し、

(3)「し」の形

今や遅し、他念なし、灯台下暗し、春秋高し、

(4)名詞+形容詞

手痛い、氣長い、手厚い、水臭い、空恐しい、

折り目正しい、盗人猛々しい、後る暗い、

(5)形容詞自体

いじましい、痛々しい、ござかしい、生々しい、しがない、

おびただし、毒々しい、

(6) 「ない」の形

…がない20句      …もない19句      …とない1句      …はない1句      …ない9句

策がない、精がない、目がない、手がない、

是非もない、交番もない、跡形もない、心にもない、滅相もない、

又とない

何の事はない、

心もとない、素気ない、他事ない、所在ない、詮方ない、

おわりに

以上形容詞について、いろいろと私見を述べて来た。形容詞の造語形の有無を立証せんがために行つた分類により、種類が十九種類にもほり、その意味する領域が人に關する感覚、感情、味覚、感情的な評価、性格的な評価、年令的な評価、一般的な評価、自己との關係などがあり、物や事に適用されるのに、形、量、感覚、質、程度、音、動き、物事を感情的に、時間的に評価するものなどを挙げた。学習者のご参考になれば幸いである。

慣用句は、日本語教育では、中級の対象と見られるものもあるが、ほとんどが上級の課程に属するであろう。

「目がない」のように、好物に「目」が問題になったり、よそよそしい事を「水臭い」と言ったり、学習者にとっては、不思議なことである。慣用句の日本語教育上のあつかいは、今後の興味ある重要な問題の一つであろう。

参考文献

大槻文彦著 日本語の文法 一八九七年 明治書房

- 三矢重松著 日本語の文法 昭和四十一年 宝文館
- 山田孝雄著 日本文法学概論 昭和四十一年 宝文館
- 日本口語法講義 昭和四十五年 宝文館
- 松下大三郎著 標準日本口語法 一九三〇年 勉誠社
- 改選標準日本文法 昭和三年 勉誠社
- 橋本進吉著 国語法研究 昭和二十三年 岩波書店
- 国文法体系論 昭和三十四年 岩波書店
- 日本文法口語篇 一九五〇年 岩波書店
- 時枝誠記著 品詞各論 昭和四十二年 明治書院
- 文法論の展開 昭和四十三年 明治書院
- 三尾 砂著 はなし言葉の文法 一九六七年 法政大学出版公司
- 芳賀 綏著 現代日本語の文法 昭和五十三年 教育出版
- 大久保忠利著 新日本文法入門 一九七三年 三省堂
- 松山洋一著 国文法 昭和四十四年 金羊社
- 蔡茂豊著 現代日語文の詞法 民国六十八年 大新書局
- 英紹唐著 最新日本語文法 民国六十九年版 自費出版
- 廣辞苑 昭和五十二年 岩波書店
- 明解国語辞典 昭和二十七年 三省堂
- 新和英大辞典 昭和二十九年 研究社辞書部